

# 哲學研究

第百七十一號

第十五卷  
第六册

## 内容 作用 對象

下 程 勇 吉

547

一般に偶然性を脱し得ぬ個別的存在に終始する限り普遍への道は開けない。事實よりは事實を得るに過ぎない。併し Sache は Naturgeschehen に盡きぬ事を見て經驗の Pathos に即しつゝ認識論上の客觀主義を確立せんとする、フッサールは自然的態度の定立作用を括弧に入れ其の含む措定 *Setzung* を中和して達せられる純粹意識に立ち還つて認識の問題を解かんとする。現象學的殘基としての純粹意識はそれに對して内も外もなきものであつて因果律の彼岸に立つ構造的絶對存在である。經驗的心理學的意識を含めての所謂自然界は純粹意識に於ける内在聯關によりて

モティフイレーレ  
 動機付けられた志向的統一によつて成立する意味賦與によりて構成定立せられた  
 第二次的存在に他ならない。純粹意識が身體との關係に於て構成する經驗的意識  
 は純粹意識に對する「志標」たるに過ぎない。經驗的意識に於ける心理學的過程の歸  
 納的分析によりて認識の問題を解かんとするは意識の物化」に基づく逆轉である。  
 一切の對象界が純粹意識に於ける意味賦與によつて成立する限り、意識の對象構成  
 にかゝはる構成の問題即ち funktionelle Probleme が現象學の最大問題の一なる事はフ  
 ッサル自らの言に徴して明らかである。(Husserl: Ideen zu einer reinen Phänomenologie  
 und phänomenologischen Philosophie. S. 176) 今所謂思惟の Gnade による對象(リッブス)でな  
 く「作用材料と代表 (Repräsentant) とが本質的內面的關係に立つ intuitive Repräsentation」  
 (Husserl: Logische Untersuchungen: II. B. 21. S. 92) に於て成立する對象の構成問題を中心  
 として起り得る一二の問題を感性主義との對比に於て考察することが此の小篇の  
 意圖するところである。

對象の成立に豫想せられる形式としての全體と部分との關係はフッサールに於  
 て「基づけ」と稱せられる。「基づけ」とは聯想作用の如き心理學的法則とは原理的に區  
 別せられ、一切の「人間的者」から獨立なるものであつて、事象自體の成立に不可缺なる

本質法則に他ならない。一般に「基づけ」とは、aがaをbと結合する包括的統一に於てのみ本質法則的に存在するとき、aはbによりて基づけられることを必要とする、又はaはbによりて補完せられることを必要とする」と記述せられる關係である。

その「基づけ」には二つの原理的區別が認められる。(Husserl: I, U.H. I. S. 276) その一は「實在的對象の實在的契機」の關係たる「外的關係或は感性的統一」に對應する「一の全體に於ける諸部分に對する部分の關係」であつて、それは直接なる知覺對象を基づける。他は「高次の對象」を基づける「部分の全體に對する關係」である。前者は諸部分が貫通durchdringenして全體をなすに對し、後者は諸部分がauseinanderであるが新らしき内容部分<sup>内容</sup>を結合する形式<sup>形式</sup>を基づける。(U. U.H. Unt. §21) 作用に即して云へば前者は作用が融合する(verschmelzen)ところの「連續的知覺過程」(L. U. II. 2. S. 148)又は「連續的綜合」(Ideen. S. 246)に對應し、後者は作用分節(Aktartikulierung)を含む「分肢的綜合」或は「作用綜合」に對應する。(L. U. II. 2. §46, 47)

「感性的統一」に於ては部分相互が相貫いて全體をなすのであつて、部分を結合する「可抽象的感性的形式」なくして統一が可能である。即ち「基づけ」が直ちに結合のみならず統一を意味し、部分がineinanderに基づけられてゐるから、それを結合する結帶<sup>バンド</sup>を必

要としなない。若しかゝる内容相互を結合する内容を「統一」と名附けるならば、統一は實在的<sup>レアル</sup>賓辭とならう、併し統一は範疇的<sup>カテゴリー</sup>賓辭である——と云はれるのである(H. D. H. I. H. D. H. S. 22)かくて感性的直觀にては内容として統一なるものが別にあるのではない。

從來所謂聯想心理學に於ては形態心理學者の所謂 Konstanzaannahme の上に立つ二元論的見解が大體行はれてゐたことは争はれない。即ち外的刺戟に嚴密に對應する獨立不變の窮極要素としての感覺の多様はそれ自身有意味的でなく、接近繼起等によりて規定される「關係把握作用」がそれに外的に加はり——要素としての感覺は何等變化することなく——心的現象が初めて有意味的 sinnvoll となるといふ考へ方が原則的に行はれてゐたと思はれる。それに對して上述の如き「基づけ」において感性直觀を理解するフツサールは意識が意味を擔はぬ感覺の束とする感性主義的見解を極力斥ける。「具體的體驗は全き意味に於て獨立的なるものとは決して云へない。その各々はその種類と形式とに従つて隨意的ならぬ拘束的<sup>ゲンゲル</sup>聯關といふ點に就て補足を必要とする (ergänzungsbefürftig) ものである。」(Ideen. S. 167) 更に「知覺は環境の規定の變化と共に變化する」(Ideen. S. 167) と云はれる。茲に我々はフツサールの知

覺に關する見解が形態心理學的立場に接近してゐるのを見るのである。形態心理學者は既述の二元論を原理的に假定する複合説に反對して知覺そのものが意味を含み、如何なる意識内容も全體から規定され獨自の意味を與へられる形態的統一を有すると説く。フッサールはその全體主義的傾向を有すると共に他面原始印象トタリステインレ（原始感覺或ひは原始與件とも云ふ）を説いてゐる。即ち現象學的時間に於て「今」の形式をとりて現れ「不變様」と形容する他なきものが原始印象であつて、それは知覺對象の或る面が體現的に餘すところなく現れ「絶對的個別性」を有する。それは對象的に意識されない。即ちその原始印象にかゝはる把握即ち「原始把握」或ひは「原始意識」は「注意的把握」——原始印象をその「背景」の聯關に於て對象化して把握する作用を云ふ——と異つて「Zuwendung」を含みなす。（二）（Husserl: Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung, Bd. IX, S. 473）「各々の今はそれが過去に沈みゆくことによりてその嚴密なる自同性を得る、この轉化に於て變様する意識は對象的志向を得る。」（Husserl: Jahrbuch IX, S. 418）と記述され、又「志向的體驗の實有的成素に屬する眞に、内在的なる内容」は志向的でない、それは作用を造り上げる、それは必須的なる支持點として志向を可能ならしめるが自らは志向されない、それは作用に於て志向される對象ではない。

私は色彩感覺を見るのでなく、彩られた物を見るのである、私は音感覺を聴くのでなく、歌ふ女の唄を聴くのである。」(I. U. II. 2. S. 374, Vgl. S. 382 usw.)と云はれる。併し所謂背景と獨立にしてそれ自身完結する把握、或ひは志向性なき原始印象とは如何なるものであらうか。かゝる原始與件の説き方に於てフツサールは多少原子論的なる考へ方を有するかの如き感じを我々に與へる。もとよりフツサールは「點的なる相<sup>Phase</sup>なるものは決して存在しない」(Jahrbuch. IX. S. 423)と云ひ、内容は verschieden ではあるが verschieden ではないと云つて内容の相互浸透性を説き、更に一切明證としての知覺——もはやそれ自らは可能的疑問を含まず、それ自身根源問題を藏せずしかも一切の根源問題が歸導せられるところの——が zeitliche Extension を有することを説いてゐる (Jahrbuch IX. S. 438)。更に又「後」になつて初めて意識される無意識的内容を語るは Ding である、意識は必然に如何なる相に於ても Bewusstsein である」と原始印象について云はれてゐる (Jahrbuch IX. S. 472—3) かく無意識的内容が否定せられる限り即ち原始印象も「意識されてある」ものである限り、それは作用の意識を含蓄し且つ又——後に見る如く——あらゆる作用が原理的に高次の統覺のもとにのみあり得るとせば、原始印象が Bewusstsein として成立するには志向性を内面的に豫想するも

のご云ひ得るであらう。もとよりフッサールの原始印象即ち内容と作用とを分ち難きものを契機として豫想せぬ限り「作用材料と代表とが本質的內面的關係に立つ」志向作用はその足場又は支持點を失ふことは言を俟たない。たゞかゝるものがそれ自身獨立に現實の意識内容として存在すると云ひ得ることは問題である。フッサールはかゝる原始把握(Zuwendung)を含まぬ意識を把握する作用(Auffassender Akt)を混同するとき Regress in infinitum に陥ると説いて(Jahrbuch. IX. S. 473) 純粹意識の最後のものをこゝに見やうとする。併し把握する統覺的作用を離れて原始把握なるものが成立する餘地は原理的でないであらう。又意識の最後のものをかゝる原始感覺に於て認めるよりか現實の意識は志向作用を含む知覺に始まるとすると共に、他面——後に見る如く——意識は無限の底を有することを認め、フッサールの所謂 *Regress in infinitum* を續け以つてその根源を探るの他なきが意識の本質であると考へる見解がより具體的に意識を洞察するものではないであらうか。もとより現象學がその一半の目的とする心理學の本質學として自ら自己を制限する限りは所謂原始印象に於て意識の最後のものを見るのも或ひは可であると云へるでもあらう。併し根源の學として哲學たらんとする限りかゝる原始印象に於て「最早根源問題を含

まぬものを見んとするは不十分であると云はねばならない。

純粹意識の反省の可能を疑ふこと自體がすでに其の可能を豫想すると云はれる如く (Ideen, S. 47) 純粹意識の最後のものは亦反省し得られるであらう、併しかく云ふことは、其が一舉にとらへられることを意味しはしない。意識は原始感覺にて盡される如き *fest* な底を有するものではないからである。純粹意識に於ける最後のもの、反省的把握の可能の豫想はナトルプの云ふ如く *Durchführung* によりて確められる假定に過ぎない (P. Natorp: Husserl's Ideen zur e. r. Phän. Logos VII. S. 240) 意識は——フツサル自から云ふ如く——心的複合、無聯關なる内容、感覺の束又は流でなく、一切の理性の根據であり (Ideen, S. 176)、根源意識はナトルプの表現を借りれば「問題根據」としての *Bewusstheit* である (Natorp: Allgemeine Psychologie nach kritischer Methode S. 32—33) かゝる理性根據としての意識の最後のものは、直ちに把握し得るものでなく、その把握の可能性は、客觀化の方向に一度歩み出て達せられる固定的統一を全體の流動に引き戻して其の統一根據を反省自覺するところの *zentrale Vertiefung* としての主觀化——より低き段階の客觀化とは原理的に區別される所の——の極限に豫想されるものである。主觀化の極限に見られる内容の全體は客觀化の極限に於いて



規定されたる全體と(ナトルプの云ふ如く) decken する。ナトルプとは全然異つた見地からではあるが、フッサールも亦内容の内的適合性 *Verträglichkeit* 或は内的可結合性——「可結合性は常に全體に關係する」(フッサール)——が意味規定と相對應することを兩者の全體性に於いて説いてゐると思ふ。即ち

Die Bedeutung ist ein objektiv vollständiger „Ausdruck“ einer intuitiven inhaltlichen Vereinbarkeit. Im Grenzfalle eines einfachen Inhalts mag man die Geltung der einfachen Spezies als Vereinbarkeit „mit sich selbst“ definieren. (I. U. II. 2. S. 106)

と云つてゐる。之は最初に見た「基づけ」の考へ又は連續的綜合の考へを意味規定と結びつけるとき當然出てくる考へであると云へるであらう。連續と云ふ限り其は全體を豫想するからである。フッサール自身その感性的統一に於ける「基づけ」に於て認めたる全體性の考へを十分表面に出すことによりて、其の「基づけ」と親近の關係に立つ連續的綜合も十全の意味を持ち得るであらう。唯 *Jetztphase* として十全に充實せられた原始感覺の現實的存在を説くことは、次に考察する構成の問題と相關係しつゝ、原子論的立場の殘存を思はせるものがあるを批評せられるであらう。フッサールは一面に於て意識の物化を、他面に於て *Chaos des Tiefsinns* を斥けつゝ *Philosophie*

von unten たることに依つて哲學を嚴密科學として打ち立てんとする力強き意圖を表白する (Husserl: Philosophie als strenge Wissenschaft, Logos I.) 併し其自身 sinnvoll ならぬ原子的要素を積み重ねて有意味に到らんとする「複合的立場に於ける der Weg von unten nach oben」(ロフカ)は、哲學に於ては徹底的に斥けらるべきであらう。全體を獨立的要素に分離し盡して其の個々の要素の充實優位を説くことはあらゆる感性主義の本質に他ならない。全體との絶縁によつて得られる不變の個體的要素としての感覺でなく、全體との流動的交渉に於て個性的統一を有する意識内容は、絶えず内面的連續に於て發展し、其の如何なる部分も全體によりて規定され主觀の恣意に委ねられざる Gestaltung を有し且絶えず Selbsttranszendenz des Lebens の契機に於て働らく。かゝる全體性に於て成立する意識に於て始めて一切の客觀性の根源或は意味の地盤が見出されるのである。而もかゝる意識内容は感覺の連續とも知覺とも云ひ得ざるものである。リツプスの語を借りればそれは「實在への機縁たり得るに止まる感性知覺でなく實在意識存在の Gültigkeit を宿すところの體驗」das Erleben (Th. Lipps: Psychologische Untersuchungen II. Cogito ergo sum) とも云ふべきものである。即ち主客の對立を超えて一切現實主觀の意識に共通なる母胎とも云ふべき全體意識に意識内容

は其の根をおろすのである。リップスの所謂體驗とは我々が表現の理解を媒介にして意識の根源を探り行くとき「個人我に於て無限に分化しつゝ自己自身を總體性 Totalität に於て體驗する超個人的意識」(リップス)として理解するものに外ならない。つねに *hic et nunc* の對象にかゝはりをもち其の内容が特殊性に於て限定的に結合せられて成立するところの現實の個人意識を其の部分として含む全體意識は、個人的意識に對しては必然に超越性をもつてのぞむ全體に外ならない。

(一) フッサールは英國經驗派の根本缺陷は事象自體に立ちかへることを、經驗によつてあらゆる認識を基礎付ける要求とを混同したものにありとて、事象は所謂經驗の與へるもの *in sich selbst* を説いて *Aber Sachen sind nicht ohne weiteres Natursachen* ……と云つてゐる (Ideen, S. 35) 併し事象とは一般に (殊にヘーゲルに於て) 内外の結合が偶然なる *Dinge* と區別されて内なるものがはたらきて外なるものを表現する精神性を有することを意味する限り、我々はフッサールの特殊なる用語 *Natursache* の代りに *Natursachen* を書き改めた。

(二) フッサールは客觀化作用としての統覺と内面的關係に立つ感覺に於て、後に自同性の理解を可能にする「本質に於ける」性質的同一者と絶對的時位ツァイトシテールに於て「此の」の性格にて現れて「絶對的個別性インデフィニテリケイト」を有する「原始印象」の契機とを區別する。音の性質音色を同じうしながら異なる強度を有する音の内容が原始印象である。「同一の音 C は今も後も感覺的には絶對的に同一である、併し個別的には異なるものである」(Husserl: *Faithbuch*, IX, S. 423)

## 二

かゝる全體的内容の世界は連續性及び形態的統一を有して直接に「客觀的實在」に

關係するが、其處に於ては主客の對立は自覺的に意識されてゐない、或は對象と作用との對立は傾向として直接に意識されてゐるが、猶對自的になつてゐないとも云ひ得るであらう。直接内容に於ては全體が部分に先立ち全體が部分の集合或は創造的合成の原理(ヴント)から導出すべからざるものであるが、反省の立場では直接内容自體に傾向として含まれたる分裂を通じて其の分裂そのものがあらはにする統一によりて還歸的止揚的に全體が與へられるの他はない。「區別と對立のみが内容を生産する手段であり道程である。」否定又は分裂と統一との體驗たる自我の作用の *Leistungs* を通じて高められ統一された内容は對象として定立される。全體的直觀内容の地盤を離れた綜合が空虚なる空中樓閣を描き出す如く、作用なき直觀は盲目的である。直觀に於ける *lebendige Einheit* から出發する分析が具體的に、我々を全體に導びくであらう。以上の如く直觀内容に對する省察を加へた後、我々は劈頭に提出した問題に歸つて考究したいと思ふ。

現象學にては認識を外なる物自體と意識内の像——前者の *Vertreter* としての——この複層的實存的關係に於ける一致と考へる立場を斥けて (L. U. II. 2. S. 42ff.) 何等かの意識に於て直接に充實せられたる内容を足場とし、其と他の内容を綜合する

志向作用又は「一般に潜勢と顯勢との對立を豫想する志向的體驗」(Ideen. S. 236) に於て超越の問題を考へんとする。かゝる立場からフッサールは如何にして *Solches* たる對象が實有的なる意識に對して成立するかと云ふ構成の問題に「最深認識問題の唯一の考へ得べき解決の源泉」を見出さうとする。對象構成作用としての Funktion は「感性的統一」を可能にする「基づけ」と高次の對象を可能にする「基づけ」を對應して、注意的構成 *attentionale Funktion* と志向的構成 *intentionale Funktion* とに分たれる。前者は感性直觀に關係する「連續的綜合」に於て成立する、前者を先づ主題としてその含む問題を討究して更に其を後者との關係に於いて考へて見たい。

注意的構成とは如何なるものを云ふのであるか。フッサールの所説によれば次の如く云はれる (Ideen. S. 73—74. S. 190. S. 231 usw.) 即ち志向性を有せざる實有的感覺の限を描く多様に於て顯勢態としての内容或は *primär aufgemeint* にして十全に充實せられた内容を起點として「あらゆる意識流と必然に關係する純粹自我」(Ideen. S. 150. S. 160) が可能的意識内容に注意的に *Blick* を轉移せしめつゝ「連續的綜合」を行なふことにより「背景」の *totes Bewusstsein* を「生かし意味聯關の統一を構成することが注意的構成又は *Beseelung, Auffassung* を呼ばれるものに他ならない。

この際フッサールが「背景」と云ひ或は「可能的意識」と云ふものは如何なるものであるか。フッサールは其を説明して云ふ「……我々は今まで cogito にてはたらく特別な型の體驗について語つた、自我顯勢態に對して一般的環境を形成する爾余の體驗は勿論上述の如き十全な自我への關係を缺いでゐる。而もそれは亦純粹自我へのかゝはりを持ち、又後者も前者にかゝはりをもつ。かゝる體驗は純粹自我に「彼のもの」として「屬し」、それは彼の意識背景であり、彼の自由の領野である。」云々 (Ideen, S. 160) かゝる意識の背景は積極的注意の如く cogito を含んでゐない。それに對して自我の視點を向けることにより直接な作用は「同一化の綜合」を行なふのである。其の「同一化の綜合」はフッサールによれば「分節」Artiklierung を含みぬ「連續的綜合」に他ならない。其の綜合に於て與件の多は同一の物を表示 darstellenするのである。作用的側面即ちノエシスは構成する實有的多樣であり、對象的側面即ちノエマはideellな Einheit である (Ideen, S. 204, S. 207, S. 279 usw.) 併しかく云ふことはノエマ及びノエシスの構成要素が原理的に異なる對立者として理解せられる如き實在的關係に於て對立する事ではない。フッサールは云ふ「我々が今 cogito の状態に於て對象に向かふとき、多くの對象が『現れる』。其對象は直觀的に『意識され』。意識された對象領野に合流

する。かく現れるものゝ各に特殊なる知覺作用 *ein gewahrendes cogito* が向けられ得ると云ふ意味に於てその對象領野は可能的知覺領野であるが、次の如き意味に於てそうなのではない、即ちあたかも體驗的に存在する *Empfindungsabschattungen* が——例へば視覺の、即ち視覺的感覺領野の統一に於て廣がつてゐる如き——如何なる對象的把握をも缺いでゐて、注視ブリックを向けると共に始めて一般に對象の直觀的現象が構成されるかの如く云々」 (*Ideen*. S. 169) 感覺與件の多が同一の「物」を指示する關係は「內的なる像」と「實在的客體」との間に於ける如き二つの實在的存在の對應的關係でなく單層的 (*einschichtig*) なる意味志向の關係である」 (*Ideen*. S. 186) それは、かの部分と全體との關係に於て、部分が全體に對して無限の次元の距りを有するにも拘らず全體をその獨特の仕方に於て反映表現することによりて、部分が全體を直ちに指示する關係にもなぞらへ得るであらう。ノエマは一であつてノエシスは多であると特色づけられることは、意識が可體驗的非空間的たるに對し對象が空間的非體驗的であるとして區別せられる事態 (*Ideen*. S. 75) が現象學的還元の立場にて云ひ表はされたものであると云へやう。かくて今の相 *Jeziplase* と *Retention* との多様より成る内在的連續としての「把握與件」と、知覺に基づけられる判斷に於て記述されるところの「知

覺られるも』Wahrgenommeneの區別を含んで知覺は成立する。(Husserl: Jahrbuch. IX. S. 443)

一般に志向性の成立するところに對象性を認める現象學のかゝる歸結は、知覺表象は來往 *kommen und gehen* するのみとして所與性の範疇を豫想せざる限り知覺の對象を問題としないリツケルトの見解に比し先驗心理學的に具體的なるは言を俟たない。併しフツサールの構成の說に於て第一の問題は實有的契機としての感覺の多様は把握によりて形式を初めて與へられる如き「形式なき素材」(Ideen. S. 173)であると云ひ得るかど云ふことである。我々は上に見た如く直接内容は「把握」フツサール或は所謂「覺知の綜合」を俟たずして意味を含む形態知覺であると思ふ。「形式なき素材」フツサールと云はれ又「意識のみが統一を與へ得る如き全體を成さぬ表象の多様」(カント)と稱せられるものは意識を箱的に考へる立場を徹底的に捨てる時、具體的にはあり得ぬであらう。尙又フツサールの所謂 *totus Bewussthaben* 或は可能的潛勢的意識とは如何なるものであるか、之も立ち入つて考察すべき問題を含むであらうが、今の問題ではない。我には第二の問題としてフツサールの *attentionale Funktion* は果して十分に其の意味賦與作用として對象性を構成する作用たるにたへるものであ



るか。問はねばならない。十全に直観的に充實されたる内容より出て其の背景を成す可能的意識に視點ブリックを注意的に或は平面的に轉移せしめることによりて成立する「連續的綜合」は對象を全き意味に於て構成する意味賦與作用たるにたへるであらうか。作用が融合し分節をふくむことなき「連續的綜合」なるものは如何なるものであらうか。我々は茲にフッサールの作用の記述を檢討して見たい。

フッサールは基づけられた高次の作用は「展開エクスプレシットされた志向的體驗」であるとして其は分節を含むと記述する。かゝる分節を含む作用は「自我が vollziehendes Subjekt として生きる Stellungnahme」(Ideen. S. 236)を含むで成立する。併し知覺の層に於ても知覺は感覺と異なつて措定的意味を含み對象を指示するのであると共に「對象性は統一意識自同意識を豫想する」(Jahrbuch. IX. Husserl: Phänomenologie der inneren Zeitbewusstseins § 31) ものである限り、vollzogene Wahrnehmung は他の基づけられた作用と同じく cogito を含むものであると云はれてゐる (Ideen. S. 236) 一般にフッサールは cogito を含む Aktivziehungen 或ひは vollzogene Akte と然らざる作用即ち Aktregungen とを區別し對立させる (Ideen. S. 236) 次にフッサールの作用の一般の見解を更に明かに示すものとして高次の作用の記述を見るならば、彼によれば高次の作用とし

ての全體作用は個々の志向の和又は組み合せフエルツェンツクではなく (Log. Unt. II. 2. S. 179) 純粹自我の durchgehende Einheit des synthetischen Bewusstseins のもつて立つが (Ideen. S. 253) 「多視的な作用が一視的な作用に轉化する」フタツクニヒツクニ (Ideen. S. 247—248) ことによつて成立するのである。一般にかゝる作用の觀方は維持され得るものであらうか。

singuläre Auffassung が先づ行はれて集合的把握 kollektive Auffassung が後から其れに加はるとする複合説に於ける作用の見解を斥けて形態心理學者が個々の作用と同時と比較又は集合等の如き全體作用が行はれ後者の全體的過程に於てのみ前者がはたらくと記述する如く、各の現在に於て内部知覺的に意識される個々の作用は永久の現在に於てはたらく統覺の下にのみ全き意味に於ける作用として成立し得るのである。特殊の規定性を脱し得ぬあらゆる個々の作用の一切を其特殊として統一する高次の作用としての統覺は低次の作用を如何に重ねるも其次元からは導出し得ぬ形式的統一意識である。かゝる統覺の必然的制約の下にのみ個々の作用が成立する限り、分節を含まぬ注意的構成フシクツクオン又は記憶想像豫料を混へぬ單なる知覺に於ける「連續的綜合」なるものはないと云はれるであらう。ohne Präsentation, keine Repräsentation. であるが、フタツクニヒツクニ ohne Apperzeption, keine Perzeption である。この二において我々は

フッサールと共にあらゆる意識は措定的であることを一層明白に高調すべきであると思ふ。その限りに於て「Seilungnahme は注意を豫想する」(Ideen S. 192)のではなくて其の逆である。(フッサール自から「注意は志向的變様の Grundart である」(Ideen S. 193. Anmerkung)と云つてゐる。)

直接に意味を含む形態的統一を有する内容はコフカの云ふ如く十全に規定されたものでないと共に全き渾沌カオスでもなく、其は Gliederung への方向を含むカオスの全體である (Koffka: Psychologie, Philosophie im Einzelgebieten S. 541) その全體的內容の含む「分節への傾向」或は「對象への傾向」が展開實現されるには所謂「把握」又は Beschlung がはたらかねばならない。我々はこの問題についてリップスの記述を引照しつゝフッサールの所説を見て行きたい。

リップスは「感性の眼」にて意識される「内容」——かゝる内容の含む問題は暫らく度外視する——に潜勢的に含まれて其と象徴シンボリックな關係に立つところの「對象」を「精神の眼」によりて「内容」から展開エンタプリーゼンし、取出ヘルトンヌキームして Denken von als geistige Schwelle が其の「對象」を意識内容に對立せしむるに到る意識の自己超出の過程を「把握活動」と稱する (Be-wusstsein u. Gegenstände S. 22) 彼も亦把握は注意の所業ライクツェンであるとする。 (Leitfaden der

Psychologie 3 Aufl. S. 15) 其の點に於てはフツサルが「構成」又は「把握」を注意の連續的過程に於いて説くのに似てゐるが、リップスは其の把握が決して感性的作用の領域に於て見出されずしてあらゆる統一の根源としての自我の作用として體驗されることを説き (Tippis: Psychologische Untersuchungen II. S. 183) 把握活動には自我の斷片が働らくと云ふことは決してなく、全自我がはたらく——之をリップスは「心的傾向」或は「律動の全狀態性」と名付ける——と記述する (Lipps: Psy. Unt. II. S. 187) リップスに於ても注意から思惟の作用に轉じて對象が定立される過程に於ける意識の自己超出性を説く時に、殊に所謂 Einschnappen を説くあたりには、フツサルにも見られる如き複合説的なる作用の觀方が残つてゐると云へるであらうが、其の把握の作用の記述を理解し行くとき、各作用に全自我がはたらくとは cogito の全體的統一のものにあらゆる作用がはたらくと云ふことを意味すると云ひ得るであらう。かゝる全自我の把握作用によつてのみ cogito の相關者としての「對象」は成立し得ると云はねばならない。

直接内容が傾向として含む Gliederung の個々の相を照し出し刻み出す作用の各が分節態に於てはたらしき其が全自我の普遍的統一の下に立つ特殊作用として自我の

中心に歸屬せしめられると共に、内容の分節が展開せられることによつて對自的になる意味聯關の相互指示の組織が成立する。ノエシスの側の作用が統覺の下に統一されると相對應して、時間の系列を通じて可能的なる直接作用が等しく自己を超えて「一定の方向に」即ち彼でなくまさに「此のもの」として志向する歸同の極として Dingnoema が構成されるのである。かくて「机は新らしき知覺を想起にて結合する綜合的意識に於て同一と意識せられる」(Ideen. S. 74)と云はれるのである。かくる自我と個々の作用とが全體と部分或は普遍と特殊との關係に於てはたらく内面的構造の上に成立する志向作用を媒介として意味賦與が行はれる故に、ノエマのひとノエシスの多とが實體と屬性とに相對應する構造に於て「物のノエマ」が構成せられ得る。全自我の統一を媒介にして内容が把握され對象が定立せられるとは次のことに他ならぬ、即ち一切の可能的作用もそれより湧き出づる無限の底としての自我の生命がそこに移入せられたものとして立せられるものが、内容の含む對象への傾向を顯勢化するあらゆる知覺體驗の指示する極としての——無としてではなくとして——對象なのである。對象は自我の資格に於て作用により志向され定立される。かくて内容は文字通りに「魂をふきてこまれて」(beselen) 對象として立せら

れるのである。形態的統一を有する直接意識の地盤なくしては作用のはたらく由もないが、意識の同一化的綜合を缺ぐ時直接意識の含む對象への傾向は對自的にされない。内容は作用に志標を與へ、作用は對象を生産する。

我々はかくて知覺意味を構成するものは連續的綜合でなく、高次の對象を構成する分肢的綜合と等しく常に *cogito* を含む作用であるとして *vollzogene Akte* 卽ち *Aktionsungen* との區別を否認する歸結に達した。併しノエマの側の區別は必ずノエシスの側のそれと相照應すると云ふ現象學の根本テーゼの一に想到するとき我々は次の如き問題に面するのである。

既述の如くフッサールにては範疇的賓辭としての統一を含むことなくして部分相互の關係から直ちに導かれる全體に於て成立する直接の知覺對象は作用融合に於て構成され、相互に疎外的なる部分アウサーライテが新らしき内容を基づける關係即ち全き意味に於ける全體と部分との關係に於て成立する高次の對象は作用綜合に於て構成されること云はれるのであるが、更に之をフッサールの「理念」に於ける「意味」の分析から見ると云はれるのであるが、更に之をフッサールの「理念」に於ける「意味」の分析から見るならばノエマの側の意味は二つに區別される。即ち「理念」に於ては所謂意味の概念が擴張せられてゐる。「論理研究」に於ては知覺は自から意味を荷はずして判斷に

特殊なる基礎 *spezielle Grundlage* を供すると説かれるに止まつたが (L. U. II. 2 § 4. § 5.) 「理念」に於ては従來所謂「概念」と稱せられたものを *logische oder ausdrückende Bedeutung* 々 限定的に名付け「直観せられるのみにて表現せられる必要なき意味」即ち知覺の『對象』を認め之も *Sinn* のうちに數へられてゐる (*Ideen. S. 256*) 即ち「綜合命題」に盛られ一般に判斷にかゝはる意味のみならず *eingliedrige Sätze* にて表はされる「知覺意味」或は「直観意味」も亦意味として認められ意味の概念が擴張されてゐる (*Ideen. S. 274*)

以上の如くノエマ側の意味對象の區別の存する限り、ノエシスの側に於ても直接<sup>直接</sup> 措定的意識は一視的に對象に向ひ又高次の對象にかゝはる綜合意識は多視的に成立する志向作用として對象に向ふ點に兩者の區別を有するのである (*Ideen. S. 247*) 例へば連續的知覺に於て同一の對象が思念される限り知覺の統一も同一化 *Identifizierung* の統一と呼ばれ得るが、高次の對象たる同一性<sup>(三)</sup> そのものが思念される *Einheit eines Aktes der Identifizierung* ではないと説かれるのである (*L. U. II. 2. S. 150*)

かくてノエシスの側の綜合の仕方はノエマの側の意味の差別に對應して嚴密なる區別を有し、一般に知覺によつて代表せられる「基づける意識」と、一般に判斷を代表とする「基づけられる意識」<sup>(四)</sup> とは滅すべからざる區別を有して、「連續的綜合」と「分枝的綜

合との對立は其の區別を示すものに外ならない。しかるに我々は知覺の層の綜合も最初から *cogito* を含んで分節態に於てはたらくと云ふのである。この時我々は比類稀なる現象學者の主張するノエマ・ノエシス並行論を無視し得ざる限り、一應問題を考へ直して見るべきであると思はれる。

我々はこの問題を考究するに當つて上下二層の意識の關係を感性直觀と範疇直觀との關係に關するフツサールの所説を尋ねて見たい。もとより意味賦與又は意味志向と直觀による意味充實とは現象學に於ては嚴密に區別さるべき相異なる象面に屬すると云ひ得るであらう、併し我々の最初の出發點は作用材料と代レプレゼンタント表とが偶然的外面的關係を有する (*effektiv* な) 對象でなく、云はゞ意味賦與作用と充實する直觀とが——靜的と動的との區別はあるも——必然的本質的關係を有する對象であつた、即ち直觀から出て志向作用を媒介としてより、根源的なる直觀に還へる循環的過程に於て見られる對象である。其の限り、上下二層の意識の關係を、知覺對象に關する感性直觀と繫辭「アル」を充實せしめて判斷を具體的に成立せしめる如き範疇直觀との關係に於て理解することは飛躍ではないであらう。

感性直觀と範疇直觀とは上下の意識の層の區別を代表する限り減すべからざる



區別を有する、即ち、範疇的綜合の最下層にさへも、基づける作用の感性的代<sup>レフ</sup>表<sup>ゼン</sup>と他の諸作用の代表との現象學的結合が *fortlaufen* することは考へられぬ云々」(I. U. II. 2. § 57. S. 170) と云はれるのである。しかし兩直觀は共に直觀と云はれる限り關係を有するのである、即ち區別と共に對應の面をも有する、故に「感性的結合はそれに對應する範疇的<sup>フォルムレク</sup>形成の基底をなす」ものであり(I. U. II. 2. S. 156) 後者は前者の「新らしき仕方<sup>ワイゼ</sup>」に於てあらはれたものである(I. U. II. 2. S. 157) と云はれるのである。かく段階の相違と共に對應の面をも有する兩直觀の關係は次の如く云はれるのであらう、即ち「一の全體と其部分との關係は範疇的である、従つて觀念的の性質を有つ。その關係を直接な全體に移入し、其に於て分析によつて見出さんとするは錯倒である。部分<sup>テイル</sup>はあらゆる分節に先だつて全體に於て潜在<sup>ポテンツ</sup>し全體の知覺的把握に於て共に把握せられるが、部分が全體に潜在すると云ふ此の事實は差當り單に部分及びそれが部分であることを、それに對應する分節せられ基づけられた作用に於て直觀し得ると云ふ<sup>イデーレ</sup>可能的可能性に過ぎない云々」(I. U. II. 2. S. 155) 此の可能性が保證されるためには先づ意識の直接内容が全體性を有する形態的統一に於て成立すること必要とするであらう、それに依て亦其内容を把握する「連續的綜合」に於ける連續性

が十分に意味を持ち得るであらう、連続と云ふ限り全體性の面を必然に豫想するからである。第二に上記の「可想的可能性の保證は、連続的綜合に於ける綜合の意味を十分に生かすことを必要とするであらう。」即ち直接内容を把握し生かして知覺對象を定立する連続的綜合は全き意味に於ける綜合でなき限り範疇的結合を與へる高次の直觀の基底をなすにたへぬであらう。綜合は區別に於ける統一に外ならぬ限り、低次の對象を成立せしむる連続的綜合も亦分節を含むものでなくてはならぬ。連続的綜合も分節的綜合(或は作用綜合)もひとしく統一を——統一とはフツサールの云ふ如く範疇的賓辭である——含む綜合である、上下二層の意識がひとしく綜合を含む限り、カントと共に自我の統一を感性直觀の領域に於ても認むべきであると思ふ。カントは云ふ、あらゆる結合はそれが意識的なるか否と、直觀の多様なるか様々の概念のそれなるか、更に又直觀の多様の結合の場合に於て其の直觀が感性的なると非感性的なるとを問はず、何れも悟性のはたらきである。我々は此のはたらきに綜合と云ふ一般名稱を附する(Kant: N. d. r. V. B. S. 130)かく考へてカントが根源的自我の統一を直觀の綜合に於て認めた如くあらゆる表象は「我考ふ」の統覺の下に立ち得ねばならぬ。我々はかくて基づける直觀が分節を含まぬ連続的綜合に於て

行はれ高次の直観が分節を含む作用綜合に於て成立すると云ふ見解を依然不十分であると考へざるを得ない。知覺意識に於ても——其の完結せる作用なると否とを問はず——高次の意識に於ける如く最初から *coſtitio* を含む志向作用に於て成立すると云はねばならぬ。フッサールの「構成」は「注意的變様」としての連續的綜合に於ては成立しない。何となれば各、現在に於て成立する作用は永遠の現在の場面としての統覺に於て分節的にはたらくからである。彼の *Funktion* はカントの所謂 *Funktion* 即ち「種々の表象を一の共通なる表象の下に統整するはたらきの統一性」(V. d. E. V. B93) と同一の形式的規定を——判斷と知覺との段階の差が存するにも拘らず——有する對象を構成するものなる限り自我の統一を全き意味に於て豫想するからである。かく云ふことは感性的統一又は連續的綜合が部分相互の關係で成立するものでなく、フッサールが高次の對象の基づけに主として許さうとする全體と部分との關係即ち範疇的關係を背後に豫想してのみ知覺對象が成立すると云ふことに他ならない。之は知覺對象が自我の移入的投影に於て對自的に成立すると云ふことが導びく歸結であると云へやう。

かくて我々はノエマ・ノエシス並行論を顧慮するときにも依然として分肢的綜合

のみが分節を含むのでなく所謂連續的綜合も分節を含み *coëxist.* を豫想すると考へねばならぬ。然らば上下二層の意識に於ける綜合の仕方の相違又は特色は何處に求むべきであらうか。我々は此の重大な問題に足をふみ入れるに先立つて對象とは何ぞやと云ふ問題に更に立ち入つて考究するの必要を感じる。<sup>(六)</sup>

(一) 直接所與はカオスの形態であつて十分な限定性を有せず細微な分節を缺ぐものとして其れは *grobe Züge* を有すると云ふ心理的事實をあげて、コフカはその事實がロック以來の問題たる一般表象の問題を重大なる意味があるとしてゐる。(Koffka: *Psychologie* S. 546 ff.) 其の考への暗示的なるにも拘らず、*grobe Züge* を云ふ語の示す如くそれが心理的事實として *vag und unexakt* (フツサール) なる限り——フツサールが「論理研究」の第一卷「序説」に於て明説したる如く——其れは直接に論理の問題を解くものではないであらう。

(二) あらゆる志向作用が意味を含むことはあらゆる作用がやがて言語と結合することとなるであらう。即ち *Setzung* は *Satz* と何等かの形に於て結合すると云へるであらう。併しフツサールの所謂知覺意味——「直觀せられるのみにて表現せられる必要な意味」(この點については尙 *Ideon. S. 215* を参照) なるものは何であるか、何等の形にても「表現」をもたぬ意味なるものはあり得るか、又表現せられた意味は直ちに所謂概念としての「論理の意味」であるか、これ等は尙精密なる攻究を要求する問題であらう。

(三) フツサールが「體驗せられたものとの合致統一 *Deckungseinheit* は決して關係、つげる、自同化の作用、自同性の志向的意識——それにて始めて自同性が思念された統一として對象化されるのであるが——を根據付けるものではない」(L. U. II. 2. S. 36) と云つてゐるのも之と同じ趣旨であらう。

(四) 綜合意識で直觀される對象は所謂高次の對象であつて、事態、關係、性質、一、多、數、序等(理念)が之に數へられる、之を「論理研究」のより精細なる分類によれば(L. U. II. 2. S. 183—184)

1、純粹感性概念(所謂 *Species*)

2、範疇的に混じた感性概念(色であること、徳性等)

3、純粹範疇概念(一、多、關係等)

等を意味する。

(五)フツサールの現象學的立場からの此の立言に對して想起されるのは實驗心理學の立場からユフカの云つてゐる言葉である。彼は、單なる形態知覺は未だ關係知覺を興へず、部分が全體から *hervorstecken* されて其れが全體の *Haupt stücke* となることの特種なる緊張——之は主觀の側の所謂 *Einstellung* を豫想する——に於て成立する「狹義の知覺」にして始めて關係判斷の基礎をなすと云つてゐる (*Koffka: Psychologie* S. 523—524)

(六)我々は後に見る如く此の困難なる問題の前に單に導かれたのに止まつて、其の解決は現在の私に到底望み得ぬことに屬するが、我々は此の現象學の重大問題がカントの第一批判に於ける先驗演繹論及び圖式論の問題と深く相通する點があることを見るを以つて一應論題の範圍を制限しなくてはならない。

### 三

扱て前節に於て我々の到達した對象は何であるか其は其の本質を自我に對する定立<sup>ゼッテン</sup>に有するものである。又は次の如く記述される「物のノエマ」である。即ち

ideale Möglichkeiten der  $\gg$  Grenzenlosigkeit im Fortgange  $\ll$  einstimmiger Anschauungen, und zwar nach typisch bestimmt vorgezeichneten Richtungen (also auch parallele Grenzenlosigkeit in den kontinuierlichen Aneinanderreihungen entsprechender Noesen) (*Ideen*, S. 31r)

此の對象は常に全自我の統一の下に包攝せられる可能的作用の必須的相關者であ

つて、一般に *hic et nunc* の對象に他ならない。「狹義の知覺は唯個別的な従つて時間的な存在にかゝはる」(J. U. II. 2. S. 144) 併し本來の對象とは個別的時間的でなく普遍的超時間的なものでなくてはならぬ。即ちこゝに全き意味に於いて全體と部分との關係に基づけられた對象が問題の前面に出て來なくてはならぬ。我々は所謂範疇的對象を以つて全き意味の對象と考へるべきであらう。フッサールが範疇直觀の對象としてあげたものは純粹感性概念・範疇的に混じた感性概念・純粹範疇概念(第二節註四參照)である、我々がこれらを一括して概念と總稱するならば本來の意味の對象は概念によりて定立組織されたるものであると云はねばならぬ。ストゥンプは内容と對象との區別の問題を記述して次の如く云つてゐる。即ち

「我々が現象・現象複合かゝる要素の關係、或は機能或は複合を普遍概念のもとに把握することによりて單なる内容は思惟の對象となる。」

「普遍概念の下に把握されるものは常に對象的に把握される。」(C. Stumpf: Zur Einteilung der Wissenschaften, S. 7—8)

かくて充實せる意味に於ける對象は知覺對象の如く意識の實有的内容から區別されるに止まらずして、更に其を超えて過現未を通じて自己同一的普遍性を維持し

以つてよく認識を可能にする概念によつて定立されたものでなくてはならぬ。作用綜合によりて構成されつゝも常に現實の作用を超え且一切の主觀的制約を脱却せる概念に於て、對象は妥當上一切の作用から獨立なるものとして本來の自己を見出すと云ふべきである。概念とは無限に充實を要求しつゝ隨所に充實の檢證を見出す意味志向の統一に於て時間のうちにありながら時間をうちに含んで超越する *ideale Einheit, Species* 又は同一的普遍性を有するものに他ならない。特殊性時間性を含みながらよく普遍性超時間性の意義を維持する概念に於て眞の對象は立せられる。こゝにフッサールも *res temporalis, res extensa* を超えて因果實體的統一としての *res materialis* を考へる所以があるのであらう (*Ideen, S. 313, 316*) 「對象とは概念がそれについて綜合の斯くの如き必然性を現はすところの或ものに過ぎない。」 (*Kant: K. d. r., V. A. S. 106*)

知覺に於ける連續的綜合によつて成立する「物のノエマ」と概念によりて規定されたる對象との區別はカントの單なる構想力の綜合(或は覺知の綜合)によりて成立する「現象又は「可能的經驗」と概念による再認の綜合にて成立する「經驗的認識の對象」との對立に他ならない。構想力とは「これなくしては如何なる認識も生じ得ない」心に

缺ぐべからざる盲目的なる機能」である (K. d. r. V. B. 103) 此の構想力に依りて綜合せられた「感官の對象」或は知覺の對象は自我に對する *Setzung* を含み無限に規定さるべき暗を宿す對象 X である。之を規定して「經驗の對象を確立するものは概念の他はない。」<sup>(二)</sup> 知覺は直觀の對象に直接にかゝはるが、其の本質を「直接に對象に關係し得る他の表象を自己のもとに包括してゐる點に有する」概念 (K. d. r. V. S. B. 93—94) の普遍性必然性によりて間接に知覺對象を規定せんとするのが判斷である。「概念は可能的判斷の述語としてまだ限定されてゐない對象のある表象に關係する」 (K. d. r. V. B. S. 94) かくて概念による對象の規定を認識と稱するならば認識とは超文法的に常に主語となる知覺的對象の含む定立<sup>ゼッツUNG</sup>によりて指示される X を無限に概念を重ねて規定し其を解消脱落せしめんとする無窮の過程であり、一切の「内實」がカントの所謂表象に止まる現實意識を、凡ての「内容」が概念となる意識一般に高めんとする努力であると云へやう。又は認識は *Sciences* を繫辭<sup>ゼッ</sup>にて盡さんとする過程であるとも云へるであらう。かくて認識とは「まだ認識を與へない」構想力の含蓄する綜合を展開規定して必然的普遍的統一を可能にする「知性的綜合」によりて「可能的經驗の對象」を確立することに他ならない。しかして現實の個別的對象の含む定立<sup>ゼッツUNG</sup>はカント



が「先驗辯證論」の「先驗的理想に就て」の章に於て展開したところの durchgängige Bestimmungs 有する個體への指標であること云ふべきであらう。(この「指標」の考に十分の關心をもつことはカントに於ける模寫說的考へ方の殘存を克服するに重大なる意味をもつであらう。)

しかし、現實個物の含む定立がかくの如き指標として考へられ且つ又範疇概念が現實直觀の對象に適用され得る所以は、知覺の對象が自我の綜合作用の相關者として成立し、其の自我の綜合自體が範疇概念少くとも實體概念を含み可能的經驗と其の對象とを媒介する中間者又は圖式であるからである。其の限り圖式としての自我は存在性と規範性との統一である。常に反省するのみにて反省されつくされぬ自我は主語となつて述語とならぬ實體——無限の作用を統一する所の機能的存在としての——である。もとより自我の作用統一が範疇としての實體性を豫想すると云ふことは其が現實に意識されてゐることを意味しない。従つて盲目的なる構想力の綜合が「知性的綜合」としての純粹悟性概念を豫想すると云ふことは次の如き意味に於て單なる要請にとゞまることも云ひ得るであらう。即ち構想力の綜合が範疇を豫想することは、其が先驗的構想力の資格に於てはたらける Leistung を通じて

即ち概念に於ける再認の成果を反省して其の普遍妥當的認識より溯つて其の基なる構想力の綜合が即自的に範疇綜合を含蓄することを主觀化的に確かめ得る要請に過ぎぬと正當に主張し得るであらう。併し又逆に次の如く云はれるであらう、即ち諸表象が偶然出會ふ儘に區別もなく再現せられるならば、發現するものは表象の一定の聯關ではなくしてその單なる無規則なる集積であらう、従つて何等の認識も發現せぬであらう〔K.d.r.V.A.S.121〕かく云はれる限り構想力の綜合はカントの云ふ如く統覺の統一原則を豫想し範疇の即自的含蓄を豫想する。この直觀の綜合に於ける範疇の即自的含蓄に於てのみ概念に於ける再認の綜合は自己のよつて以てはたらく地盤を見出すのであると云へるであらう。かくて論理的には感性直觀に於ける範疇の含蓄は普遍的認識の成果より要請せられ、又逆に後者は前者に依てのみ發現すると云はねばならない。併しこの循環的に相互に相豫想する兩者の關係が單に論理的立場に於て論じられることを以つて足れりとなし得るであらうか。

現象學的立場は單に論理的に要求せられるとするに止まらずその事態の直接なる明證性を直觀的に見出すことを以て其の特色とする。感性直觀の領域に於て形態心理學的立場に立つとき、感性直觀は直接に有意味的なる全體的形式として直觀せ

られるのである。その限り部分を全體によりて規整する範疇的統一を含むものとして感性直観は我々に體驗せられることが直接に證し得られると云はねばならない。更に高次の意識に於ては「概念に於ける再認の綜合」を保證し直證するものとして範疇直観が十分の意味を以て來なくてはならない。即ち絶對的に超越的なる客觀的價值が超越的當爲に於て天下りの的に我々に entfallen するとして、價值と判斷意識一般との過渡ユバレンクに於て範疇を考へる如き立場を採らぬ限り「直接知覺に於て即自的に含まれ共に把へられる部分と全體との範疇的關係が直観し得られると云ふ可想的可能性」が基づけられた作用に於て其の實現の檢證を直觀的に見出さねばならない、即ち範疇綜合が何等かの意味に於て體現的に又圖式的に我々に對自的にならなくてはならぬであらう。しかしヒュームが極めて鋭く批評した如く實體と屬性との如き範疇的關係は見るべからず聞くべからざるものである (Hume: Treaties of human Nature Book I. Part I. Section VI.) ヒュームは其の所謂外部印象に對する「内部印象」又は「反省」を感情情緒慾求嫌惡等の情意作用に限つて (Treaties, Book I. Part II. Section III) 作用意識の方向に歩み行くことが無かつたためか、實體、屬性の關係の體驗を経験的心理作用としての想像 imagination に求めた所に (Treaties, Book I. Part I. Section VI) 彼の懷疑

は落付いた。併し布伦タノ以來の意識に於て實體的なるものを見る立場に立つとき我々は實體と屬性との關係を體現的に或は範疇直觀的に與へるものとして純粹意識に於ける個々の作用と其に對して不即不離の——密接に相交渉しつゝも合致せざる次元の距離を有すると云ふ意味に於て——關係に立つ統覺との内面的構造の自覺的體驗を見得るであらう。作用と統覺との構造的體驗は實體と屬性との圖式であるとも云ひ得るであらう。もとよりこのことは作用と作用意識としての高次の統覺との内面的體驗聯關に於て全體と部分或は實體と屬性との如き範疇的形式が認識根據を有し其に於て妥當の根據を見出すことを意味しない。相矛盾する二命題が直接なる Deckung に齎らし得ぬと云ふ心理的事實の上に矛盾律の根據を見出さんとするランゲの説をフツサールが不十分であるとする如く (J. D. H. B. S. 93ff.) たゞ如何に純粹意識に於ける先驗的構造とは云へ其の上に其自身妥當する論理的法則を基礎付<sup>ベグリユンデ</sup>することの逆轉なることは言を俟たない。しかし其自身妥當する範疇形式は亦體現的に直觀されて其の實質的なる成立を確證するものでなくてはならない。その確證を與へるものとしては自我の内面的構造體驗の他はない。かゝる範疇直觀に於て範疇的關係が我々に zugänglich となる故に上述の「主觀的に

確かめ得る要請が虚しき空語としてでなく直観にて充實されることにおいて眞理性をもち得るのではあるまいか。實に此の根源的範疇直観は其が成立の條件とする彼の可想的可能性——即ち直接の知覺的全體に範疇的關係としての全體と部分との關係が含蓄され其を高次の作用にて直観し得る可能性の實現又は充實に他ならない。かくて自我の綜合によりて成立する直観的對象が眞に具體的なる意味に於て範疇の統一を含む事を直證的に——單に論理的に要請し得るに止まらず——立言し得る一の手が、りが與へられたと云へるであらう。かくてカントに於ける概念による再認の綜合とフッサールの説く範疇的直観とは同一の段階に於て一は認識の對象に他は對象の認識にかゝはりつゝ相豫想して全き意味を發揮すると云ふべきであらう。<sup>(三)</sup>

かくて「經驗的直観の統一は範疇が所與直観の多様一般に對して規定する統一に他ならぬ」(K. d. r. V. B. S. 145) が故に構想力は範疇に則つてはたらく先驗的構想力の資格に於て機能を發揮し「二つの斷崖の間を通じて」概念に於ける再認の綜合を可能にするのである。「一、の判斷に於ける種々の表象に統一を與へる機能が亦、一の直観に於ける種々の表象の單なる綜合に統一を與へる機能と同一のものである」(K. d.

F. V. B. Sios) と云はれ「可能的經驗一般の先天的制約が經驗の對象を可能ならしめる制約である」と云はれるが故に「現象」を與へる感性と「經驗的認識の對象」を與へる悟性とは生産的構想力に依つて媒介せられるのである。

我々はかくて上下二層の意識がひとしく *corrio* を含むことを現象學的に立言し更に上下の意識の綜合に於ける論理的關係をカントの立場に於て考察し來つて、カントの概念に於ける再認の綜合とフッサールの範疇的直觀とが同一の段階に於て相豫想するものなることを見た。もとよりカントに於ける「概念に於ける再認の綜合」は直觀の綜合による「感官の對象を範疇概念によりて合法的として再認的に規定して經驗の對象を確立するものであるに對し、フッサールは知覺の對象に外部知覺の明證を許してゐるのであつて、其の説く所の範疇直觀は範疇又は關係一般そのもの、體現的直觀である限り、高次の對象を以て低次の對象を規定せんとするものではない——と云ひ得るであらう。併しそのことは何等兩者が同一段階に於て相豫想しつゝ成立すると云ふことを妨げるものではない。かくてカントの立場とフッサールの所説とは——その滅すべからざる區別にもかゝはらず——相深く通ずる面をも有するのである。

さてカントに於ける「覺知の綜合」と先驗的構想力に依る綜合とに關係せしめつゝ、フッサールの連續的綜合と分節的綜合との現象學的記述を企てることは重大なる問題であるが今の問題ではない。フッサールの上下二段の意識の綜合がひとしく全體と部分との關係に基づけられ且つ作用の側から云つて共に全き意味に於いて *cogito* を含むことを我々は主張し來つたのであるが、さきに云つた如くノエマの側の意味の相違と共にフエシスの側の綜合の仕方も亦異るとされる限り、高低二段の意識に於ける綜合或は直觀の特色及び區別を相互の關係に於て現象學的に記述することは、綜合又は *cogito* の統一と直接内容の統一 *Einheit* との關係の問題と共に、この論文にては解決を與へられずして殘されたる問題である。

併し我々は高次の意味も知覺意味も十全なる意味に於て等しく自我の綜合を含むことを結論し得ると思ふ。かくて知性的綜合の原型又は圖式としての自我の相關者として構成せられたものが形像的綜合としての知覺對象に他ならぬ限り、すべての存在は最も廣き意味に於てロゴスを荷ふ。かゝる立場に立つとき、現象學的分析より出たフッサールが「論理研究」に於て一度は知覺等にかゝる意味を「動搖する意味」 *schwankende Bedeutung* として認め (*L. U. II. 1. S. 86-88*) 其を「意味する作用の動

搖]Schwanken des Bedeutens に歸して (J. U. II. 1. S. 91) かくる動搖を超克するに Schwankenlosigkeit der Vernunft の要請を以つてせんとしたが (J. U. II. 1. S. 90) 「理念」に於ては如何なる作用もうちに論理的者<sup>ロギカルな</sup>を宿す (Ideen. S. 244) 云ひつて積極的に Universalität des Logischen を説くに到つた (Ideen. S. 244) 所以をより整合的に理解し得るであらう。併しこの「汎論理主義」の特質を明かにするのは此の論文に残されたる最後の課題である。

(一) カントに於ては經驗の語は必しも一義的に使用されてはゐない。リッケルトが指摘した如くカントにては經驗の語は時として感覺又は知覺と同義に用ひられ、時に知覺に對立するもの即ち學的認識の義に使用されてゐる。(Rickert: Gegenstand der Erkenntnis 4 u. 5 Aufl. S. 332) 故に一應こゝにあげた如き用語によつて問題の對立をあげるも必しもカントのすべての用語例を一致しないことは明かである。

(二) 普遍概念が事物の共通相の抽象によりて得られると云ふ經驗的歸納の手續の分析を論據とする唯名論の立場から概念自體の自立的妥當を否定して相對論更には懷疑論に達したのは、英國感性主義の必然的歸結である。感性主義の相對論的歸結の一切は普遍概念の否定から出づると云ふも敢て過言でない。

(三) この概念に於ける再認の綜合と籠略的直觀とが同一段階にて相互に豫想することを次のことから確かめ得るであらう。即ちフッサールに於ては、感性的對象が體現的に現れ單なる表象の上に立つ志向として命名作用を含むところの知覺と、かくあることと云ふ事態が志向されて單なる表象の上には立たない陳述作用を含むところの判斷とは根本的に異なる作用であるが、二者を文法的に區別する標識は繫辭「アル」である、この「アル」を充すものは高次の直觀である。又カントは次の如く云つてゐる、即ち「判斷の繫辭「アル」は所與表象の客觀的統一を主觀的統一と區別することを目指してゐる。何となれば繫辭「アル」は根源



的統覺に對する所與表象の關係及び所與表象の必然的統一を意味するからである」(K. d. r. V. B. S. 101-102) 即ち繫辭「アル」は純粹統覺にて成立する綜合の必然的統一を意味する、其の必然的統一に於て概念に於ける再認の綜合も行はれるのである。かくて「アル」を成立せしめる綜合及び「アル」を充す範疇直觀は同一の段階にて相豫想しつゝ成立するものと云はれるであらう。

#### 四

カントに於ては「物自體」の側の「素材」(Materie)と「現象」の側の「感覺」との對應關係は深い溝渠をもつてゐる。此の點に於て、作用と對象とを明別して意識の箱的觀方を排するフツサールが感覺は隈を描くも對象の體現的なるあらはれであると解する見解に對してカントの考へ方は著しい對立をなすと云はれやう。第二にカントによれば「種々の知覺は心性に於て其自身箇々に分散して意識せられるのであつて其を結合する不可缺の能力が構想力なのである」(K. d. r. V. A. 120) 而して構想力による再現に於て成立する規則的表象結合としての表象聯合の可能性の現象に於ける客觀的根據は「現象に於ける親和性」と名付けられるが、その根據は「統覺の統一原則以外の何處にも見出されなす」(K. d. r. V. A. S. 122, 113) 又カントは「結合は表象中客觀によりて與へられないで主觀自身に依つてのみ成される唯一の表象である」(B.S. 130)と云つてゐる。かゝる意識の原子論的觀方に於てカントの感性論は知覺自體が主觀

肆意を容れざる全體的有意義的形態であると考へる形態心理學に著しい對立を示してゐる。英國經驗派の傳統たる模寫說的又は箱的に意識を考へる立場はカントにても十分超克されず上述の如き原子論的見解を殘存せしめ、時間空間に就ては先驗觀念性が又直觀の成立に關しては其の必須的制約として覺知又は構想方の綜合が説かれざるを得なかつたのであらう。コルネリウスが第一批判の根本缺陷として第一にカントが受容者としての主觀と其に先だつて其自身存在する現象——之は恐らく物自體と云ふべきであらう——との二元論より出發してゐること、第二に現象の結合が主觀の側にて必要であることをあげてカントが部分より全體を理解する原子論的立場に立つことを指摘したが、(H. Cornelius: *Kommentar zur Kants K. d. r. V. S.* 68) それは當を得てゐると思はれる。

我々の出發點は全體的直觀であつた、カントの所謂現象の親和性は直觀自體の有するものである。然して作用と内容との區別を高調するストックンプが新批判主義者に反對し實體性因果性は思惟の形式でないこと云ふ如く(C. Stumpf: *Erscheinungen und psychische Funktionen S.* 30-31)我々が自然に法則を賦與すると云ふよりか、我々のうちなる自然の法則に我々が還へるのである、又は其を自覺するのである。「經驗の對象」

の確立は文字通りに「概念に於ける再認」に他ならない。即自態なる内容を對象的に展開する作用は對象を zeitigen するが、對即自態としての對象は作用から解放されて時間なき言葉 zeitlose Sprache に於ける自立的妥當に據つて本來の自己を見出すと云へやう。素地として内容が藏する「無上命法」としての「對象の要求」(リツプス)の概念によつて全的に展開せられたものがカントの「經驗の對象」である。フツサールが云ふ如く「定立は原本的所與性に於て其の根源的權利根據をもつ」(Ideen. S. 284)のである。綜合する故に直ちに眞とは云へない、構造上志向性を有する意味志向も内實的に直觀に於て其の意味充實を仰ぎ得ぬものは少くないからである。志向作用はかくて問の性格を脱し得ぬが故に、絶えずその地盤又は母胎としての根源的直觀的全體に還つて其處に於て認識論的契機としての充實を仰がねばならない。更にそれに止まらず志向作用は他面に於て次の如き構造を有する、即ち志向は分離しないで思念する、志向が正にこのもののみを思念して他の何物をも思念しないのである限り、志向はその思念するものを閉ぢ込める<sup>アフェンユルツセ</sup> (Log. Unt. II. 1. S. 130) と云はれる如く、無限の自己生産的流動的全體としての内容を部分的に固定し限定するのが志向作用に他ならない。其の故に流動的全體から出て一定の範圍に於て内容を限定する志向

が直觀に於いて充實されるとは、志向作用が其の「支持點」或は出發點としての光れる内容の一點に歸ることではなく、意味志向が自己を超え自己の限定性を否定し、より包括的又はより根源的なる全體としての直觀に還りて「眞理の尺度」[Maßstab des Wissens] を高めることに他ならない。従つて正に其の故に直觀に於ける意味充實自體が更に自己のうちに分裂を醸し、より全體的な志向作用を呼びおこし新なる對象定立を動機付ける。かくて無意識的統一より意識的分裂にすゝむ志向と限定的分裂的意識より全體的意識にかへる意味充實とは「靜的」でなく相互に他を呼びさますものとして無限の相關的發展の圓環を描いてその展開の完成を知らない。かくて生産的全體内容が限定的統一態としての對象によりて規定され盡し置換され終りて永久の靜止に達すると云ふ時は理念に於てのみ可想的である。内容は絶えず新らしき面目を呈露してやまない。「沒意識的」に始まつて意識的に終る自然はまさに「意識をもつて(主觀的に)始まつて沒意識に或は客觀的に終る自我」の地盤であり母胎である。今や我々はさきに最後の課題として提起した問題に答へる時に達した、即ち現象學的汎論理主義を特色づけるべき段取りに我々は達したのである。我々の汎論理主義はつねに全體的直觀に還つて「原始現象」 [Ursphänomenon] に質し聽き以て認識論

的契機を見出す點にその特色を有する。約言すれば其は「下からの汎論理主義」である。

我々は此の小篇の全體を約言するにジンメルを以つてして結語に急ぎたいと思ふ。——「感性主義の根本的な本質特色は其が個物に執し、又斷片を唯斷片として解し、綜合を其性質上何處までも個別者を出でないところの個別者を集め重ねたものと認めるだけで、綜合を一の内面的なそしてあらゆる個別化に先立つ統一の象徴として解しないところにある、……感性主義にとつては精神の綜合能力は何か主觀的なもの或ひは第二次的のものであつて、其れは事物の客觀的秩序に於ける何物にも一致しないと考へられてゐる。到る所に全體性統一性を把握せんとするゲートの精神的傾向は正確に感性主義に對立する。……彼にとつては全體が部分に先立つてゐる、故に彼が嘗つて對立を一致に齎すことを再合一と云ひあらはしたのは彼の特色を示すものである」(G. Simmel, Goethe 1913 S. 67-68) かく述べてジンメルは、存在の全體を統一態として考へ現實の部分的存在を其の統一態の代表又は再現として見るゲートの直觀主義を感性主義との對立に於いて描いてゐるが、かゝる全體と綜合との考へ方は哲學に於て重大なる意味をもつてゐると云へやう。意識に關

はりなき對象の自存的存在を信ずる素朴的實在論の如く無批判的でもなく、思惟の綜合の方面を高調するの餘り思惟による現實個物の發出性を説くと批評せられる形而上的唯心論の如く沒批判的でもなく、脚下の超越的全體に根をおろすと共に、其を對自的にして概念の明瞭なる自覺に高める點に、綜合する精神の印刻を宿すものとしての認識を理解する立場は全き意味に於て批判的の名に價ひするであらう。

(一)リッパスが「對象の要求」を説くのは彼の所謂統覺に於てである。即ち「内容」より「對象」が取り出され（ベツクネーヒト） Denken von によりて自我に對立せられた上、對象自體の持つ「權利要求」又は「妥當性」を反省する作用としての Denken über に於て、「對象の要求」は語られる。換言すればそれは判断に於て問題となるのである (Th. Lipps: Bewusstsein und Gegenstände V.) 又彼は「對象の要求」なるものは強度を有しない點に「強制」其他の心理過程と區別される特色があるを云つてゐる (Lipps: Leitfaden des Psychologie 3 Aufl. S. 34.) その限り所謂内容に於て「對象の要求」を語るは妥當な缺ぐが如く思はれる。併し Denken über は精神國としての Denken von を通じて、注意に於て發展する「把握活動」に連絡することによつて「内容」に關係を有するのである。リッパスに於ても其の限り知覺と判断とは内面的に連絡を有するのであるから「内容」に於て——たゞへ象徴的たるに止まるにせよ——すでに素地として「對象の要求」を語り得るものであると云はばならぬ。事實彼自身「對象の要求」と「内容」を極めて接近させて語つてゐるを思ふ。(Vgl. Leitfaden des Psychologie S. 30—S. 31)

——完——